人間発見

政策研究大学院大アカデミックフェロー

黒川（くろかわ） 清（きよし）さん

「出る杭」が日本を変える ③

米留学、自立を求める厳しい指導に衝撃

臨床・教育も高いレベル、真剣勝負の連続

猛勉強で米でも医師免許、42歳で教授に

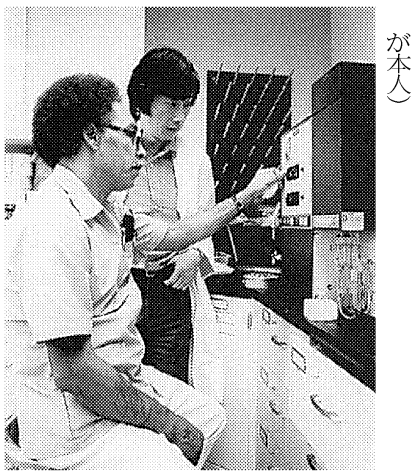
1969年7月、テレビでアポロ11号の月面着陸を見てから米国に出発。途中立ち寄ったハワイで、同沖に無事帰還のニュースに接し、感動する。

すごい国に行くんだと、ちょっと興奮しましたね。フィラデルフィアは緑がとてもきれいでした。ペンシルベニア大学に行き、交代で日本に帰る先輩と引き継ぎをしていると、担当教授の部屋に招かれ、初めて挨拶を交わしました。

身構える私に、教授は開口一番「あなたは私の助手になるために来たんじゃない。独立した研究者になるためだよ」と言ったのです。教授に指示されたことをやるもんだと思ってたから驚きました。

さらに「院生ではない。専門家なんだから、対等に意見を言いなさい」「英語で議論をしていてわからないことがあるのは当たり前。わかったようなふりをしていないで聞き返しなさい」とも言われました。

衝撃でした。物腰は柔らかいけど、厳しい先生で、指導を受ける私たちが何をするかを黙って見ています。何も見つけられない者には廊下で会っても知らんぷり。はっきりしているのですね。毎日のように話をしている若手研究者もいて、焦りました。



米ペンシルベニア大で実験に取り組む（右が本人）

私たちの自立の力をテストしているんです。最初「もしテーマを見つけられなかったら3つ4つ提示しようか」と教授に言われましたが、「意地でも見つけてやる」と思いましたね。

次第にデータが出始め、面白くなっていき、あっという間に2年がたってしまいました。帰国も頭をよぎりましたが、自分の研究分野で興味深い論文を見つけ、教授に相談したところ、筆者に推薦状を書くからそこで勉強すればいいと言われました。それがカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）でした。

71年にUCLA医学部内科上級研究員、73年に同助教授、74年に南カリフォルニア大学医学部内科准教授となる。

米国の医学部臨床系の仕事は、研究、臨床、教育の三本柱で構成されています。日本のように研究偏重ということはなく、臨床、教育も高いレベルを要求されました。そうでないと、学生や助手がいい先生を求めて移動してしまう。手を抜くわけにはいかないのです。教授や助教授も流動性が高く、人材の交流と移動が大学を超えて活発に行われ、教員一人ひとりの評価が大学全体の評価になっていくのです。それが米国です。他流試合の真剣勝負の連続。怖いけどやりがいはありました。

もちろん、日本のことを忘れていたわけではありません。最初は1年くらい帰国が遅れても東大は受け入れてくれるだろうと高をくくっていましたが、2年、3年たつと、「破門だな」と思い始めました。大学もそうですが、日本の組織では、自己都合で延期するような場合、4、5年もすればかつてのルートには戻れません。本気で悩みましたが、「まあ、いいか」と。ずいぶん無謀ですよね。

気持ちを切り替え、米国で生きていく覚悟を決めました。その瞬間、競争相手は米国人の医者になり、大きな問題が現れました。研究だけなら日本の医師免許だけでいいのですが、臨床や教育中心の仕事をするのなら、米国の医師免許は必須。自分は研究者タイプじゃないとわかってきたから、選択肢はひとつしかありません。

猛烈に勉強しました。試験は基礎6科目、臨床6科目、そして臨床症例検討の試験を3日間で行います。受験資格を得るための手続きも含めると、受験まで3年かかりました。幸い医師免許は1回で受かりましたが、内科専門医の試験は1回不合格になり、翌年には内科も内科腎臓専門医にも合格しました。資格はすべて取得。これを研究や学会発表、論文執筆、教育、講義などの合間にやるわけですから本当に大変でした。妻に「こんなに勉強している姿は見たことない」と言われました。

77年にUCLAの准教授、79年に教授となる。

米国に来て10年。42歳で教授になったとき、フェアな国だなあと思いました。日本じゃ考えられないですから。このころロス郊外の丘の上にプール付きの広い家を買い、秋田犬も飼って、妻と2人の子どもと4人で暮らし、「ハッピーってこんなもんかなあ」と思っていました。そんなとき、東京から一本の電話が入ったのです。

（聞き手は編集委員　山田康昭）

(C)日本経済新聞社 無断複製転載を禁じます。